

かけがえのない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

志 太 平 野



八

山の氏神さまは、
みんなの心の社（やしろ）。

下大沢の山神社



梅の香もまだ残る平成 23 年 3 月 1 3 日。山神社の祭神を近くの西方八幡宮へ遷座合祀する
神事に集まった、下大沢ゆかりの人々。

編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）
撮影／村山正良（M2WORKS）
文／岡本國治（岡本戦略広告事務所）

葉梨川の上流、下大沢は、薬研やげんのようなV字型に山が迫り、その底を流れる川に沿って民家が点在している。この地の氏神様である山神社は、樹が緑濃く繁る山中にある。道路から一軒の民家を抜けてすぐ山道に入り、登り初めて3分。鳥居をくぐり、苔むした石段を上がったところに社殿が建っている。まわりを取り巻く樹々のために昼なお暗いが、木漏れ日がところどころに差し込んで明るい光を投げかけている。

山神社は、創建が文政七年（1824）になると伝えられている。その長い歴史も平成二十三年三月一三日に幕を下ろすことになった。ご神体を遷座※せんざして、近くの西方八幡宮へ合祀※ごうしされたのである。

なぜ、遷座することになったのか。それは住民が高齢となり、徒歩3分とはいえ、急峻な場所もある山道を登ってお祀りまつ、お守りするのがむずかしくなったからだと聞く。また、崖崩れの危険性から、多くの家族が当地での改築、新築をあきらめ、川下の平地へ居を移していった。昭和三十五年に19戸あった家は、現在は5戸が残るのみとなっている。遷座の背景には、こちらの事情も大きく影響している。

氏神様のもとに育った人ならわかることであるが、神

※遷座：神仏または天皇の座を他の場所に移すこと。また、それが移ること。

※合祀：ある神社に祀（まつ）ってあった御神体を、他の神社に移して一緒に祀ること。

社は「神の社^{やしろ}」というだけではない。子どもには遊びの場であり、大人には祈りの場。そして祭礼では、それぞれが割り当てられた役割をはたしていくことによって、一人一人が地域の仲間、共同体の一員であることを再確認する機会ともなる。

日々の暮らし、思い出の中心に社^{やしろ}がある。それだけではない。社^{やしろ}は、遠い昔からの土地の記憶を宿している場所であり、営々と繰り返されてきた暮らしや、先祖代々の来し方の人々にまで思いが繋がっている。自分がどこから来て、今どこにいるのか。「神の社^{やしろ}」は、自分というアイデンティティを確認させてくれる《ふるさと》の象徴であり、「心の社^{やしろ}」でもある。

近くに合祀するとはいえ、先祖代々祀^{まつ}ってきた氏神様を生まれ育った場所から失うのである。地元の人々にとって寂しくないはずはない。

下大沢は、戦国の世の覇権争いに敗れた今川家家臣が隠れ住んできた集落だとされる。素性を隠すために、本来の氏を変えているが、この地における系譜を21代先までさかのぼる家もあるという。

武士末裔のひそやかな矜持は、教育の充実をもって伝

えられてきたのだろう。明治以降においても、この地は葉梨村の村役を担うなど、才知に長けた人を多く排出してきたということである。

その中の一人が発案し、広めたのだろうか。確かなことは今ではわからないのだが、下大沢の《村を興す》画期的産業が興った。ミカンの栽培である。

昭和六年、志太郡農會長より「下大沢愛柑會」に贈られた「褒状」が残されている。すでにこの頃には優秀なミカン産地としての地位を確立していたようである。昭和三〇年代には、冬の収穫期には、北陸や長野などの雪国からやってきた出稼ぎの人が、年末まで、あるいは二月までというような約束で、数多く働いていたという。

当地の地形や気候、手入れ法などが複雑にからんだためなのだろうが、他の地で同じように真似て栽培しても、味はなぜか同じにはならない。それほどこのミカンは高い評価を受け、珍重されていた。

手入れの始まる春先、ミカンの花の咲く初夏。折に触れて山神社では豊作を願う祈りが繰り返されてきたことだろう。そして収穫前には、作業の安全や出来ばえ、販売取引の成功を祈願する参拝もまた――。

切実な祈願がもつとも行われたのは、戦時下であるう。出征する者を送り出すときだけでなく、出征した後も、《おこもり》と称して、夜を徹して、あるいは口ウソクの火が消えるまで、武運長久を願い上げる祈りが山神社で行われた。さらには、毎朝欠かさず参拝する人もあったという。戦場に子を送り出した親や兄弟縁者の思いは、いかばかりであっただろうか。

山神社の例祭は十月二十一、二十二日であった。ただし、幟を揚げ、御神燈を灯すのは本宮筋の西方八幡宮の例祭日と定められていた。他所に出た者、嫁いだ人もこの時ばかりは《ふるさと》の祭事に帰ってくる。

社殿横には煮炊きの出来る設備もあった。子どもたちには甘酒や煮物、お菓子が配られる。お赤飯もハレの日の特別なごちそう。それはそれは、誰もが心待ちにした祭であった。

子どもの数があつた頃には、西方八幡宮の御神輿を借りて子どもたちが練りまわしていた。普段は静かな谷間が、元氣なかけ声で賑わつたことだろう。

私たちは、失って初めてその大切さを思い知ることが

ある。東日本大震災では、その失ったものが、あまりに多くの人命であり、土地家屋、港、田畑、職場を含む根源的なものであったために、一草木を初めとした生きている《いのち》のすごさ、生かされていることのありがたさを改めて思い知ることになった。

下大沢の人々は、ご神体を遷座した。西方八幡宮へ行けば、そこに合祀されている。祈りの対象を失ったわけではない。しかし、《ふるさと》が《ふるさと》である拠り所、その求心力となる「神の社」^{やしろ}を失ったことは間違いない。されど……それでも、「山は青きふるさと、水は清きふるさと」である。いつもと変わることなく梅が咲き、川沿いには三つ叉が黄色い花を咲かせている。この土地に残る生活の記憶や、記憶に刻まれてきた土地の誇りはそう簡単には消えてなくならないだろう。

これまで生活の手軽さや都市化と引き替えに、私たちが見失ってきたものは多い。春に緑が芽吹き、花が咲く。その当たり前前のことに向き合うとき、自分もまた生かされている貴重な《いのち》であることを知る。《ふるさと》のありがたさ、人々との温かいつながり、自然の恵み。かけがえのない、ほんとうに大切なものとは何だろうか？ ……その原点に、もういちど立ち返る時のようである。

参考資料:「下大沢の氏神様」青野光夫さん取材まとめ

※そのほか本稿は、遷座合祀の後の懇親会に出席の方に取材した話をもとにまとめている。



























褒狀

志太郡葉梨村

下大澤愛柑會

優等賞

右 志太郡柑橘同志會産
第八回志太郡柑橘 品評會ニ於テ

成績優良ナルヲ認メ本會

副賞規程ニ依リ之ヲ授與ス

昭和六年二月十九日

靜岡縣志太郡農會長山口忠五郎







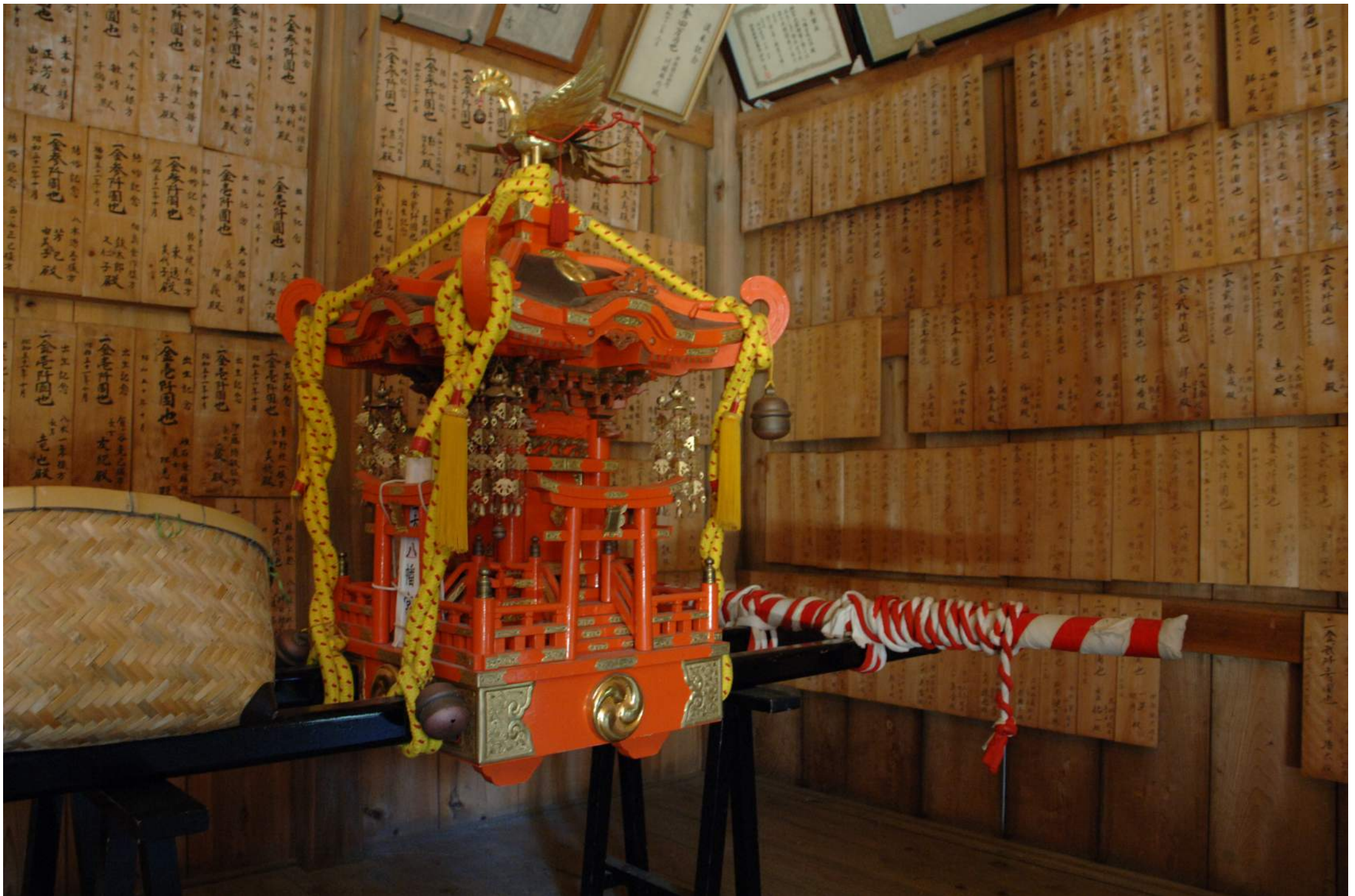






























和ふり
為十代天皇陛下
御即位
奉祝



悠仁親王殿下
ひさひと
ら建やかふよこ成長を祈り申
奉祝 天皇陛下 御即位



心に旅を





